

浄土

monthly JODO

2019
May

5

法然上人鑽仰会

貧乏董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー

東京上野の不忍池では、定期的に骨董市が開かれている。花見の時期（三月中旬から四月中旬）には、出店数も人出も多い。十年ほど前は、すぐ近くの湯島に仕事場があったのでよく覗いていた。骨董市というよりもどちらかというと古道具市的な感じで、出品されているものも雑誌や古いレコード、洋服などのリサイクル商品が多かったように記憶している。

今年、久しぶりに出かけてみた。場所が少し移動して、弁天堂近くでの開催であった。

写真の版木はそこで見つけた。店主に「これは何の版木だろう」と尋ねると、「チベットのろうけつ染の版木だね」とのこと。いつごろのものだろう、けっこう古

いようだけど聞いてみる。「年代まではわからないね、そこそこ古いんじゃないかね」。一三〇〇円の値札が付いている。厚かましく「一〇〇〇円にならないかな」と言ってみる。店主は渋い顔をして「百円だったら引くよ」。私にとっては大金だが、彫られた花の模様が素朴で美しい。買わないときと後悔するだろう。一二〇〇円で購入した。

ろうけつ染は世界各地に古くから伝わる布の染色法である。中国の新疆ウイグル自治区ホータン地区・ニヤ県の精絶園遺跡の東漢墓から、蠟染の綿布が発見されている。このことから二、三世紀ころから、ろうけつ染の技法があったと見られる。

日本でもろうけつ染による胴着（大歌茶膳・緞半臂）が正倉院宝物にあり、天平時代から見られる染色技法である。京都の京友禅でも「蠟緞友禅」がある。

この版木が本当にチベットのものののかはわからない。ただ、中国の少数民族に古くからの伝統的なろうけつ染がみられるし、東南アジアにも多い。普通は筆で、滲かした蠟で布に模様を描き、染料でその布を染色し蠟を水洗いするのだが、この版木は布に繰り返しの模様として蠟を付着させるのだろう。

多くの人の手に触れてきたせいか、温もりが隅々に行きわたったり、描かれたかわいい花の模様を楽しみながら、仕事机の上にそっと置くことにした。

版面左右 170 ミリ、
天地 56 ミリ。
背面の取っ手までの高さは 70 ミリ。
重量は 290 グラム。手に取るとずっしりとした感じである



上は版面の正面からの写真。下は図柄がわかりやすいように画像を反転してみた。描かれているのは何の花だろうか

浄土

2019/5月号 目次

追悼 須藤隆仙上人 浄土宗での追善の意義	須藤隆仙	2
法然上人と親鸞聖人②①	林田康順	8
連載 微風吹動	石田一裕	14
連載 江戸の川を歩く	森 清鑑	18
連載小説 渡辺海旭⑨⑦	前田和男	24
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	31
編集後記		32

表2 貧乏骨董

三宅政吉



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

表紙写真＝鬼海弘雄

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

追悼

須藤隆仙人

浄土アーカイブ 昭和61年4月号

浄土宗での
追善の意義

函館称名寺住職

須藤隆仙

最近、二、三の宗教雑誌で、ある人が盛んに、「浄土教では、死んですぐ極楽往生すると説く」のだから、その後で四十九日法要や年回法要などの追善供養をするのは、おかしい。教義違反である。それを浄土宗や真宗の坊さんたちは平気でやっている。とんでもないことだ」といった意味のことを述べているのに出くわしました。

これは非常に間違った見方ですので、一言しておきたいと思います。以下は、浄土宗の立場について述べさせていただきます。

お説の通り、浄土宗の教えは即得往生（速かに極楽に往生する）ですが、それは念仏を称えた人に限られるのです。口称念仏が阿弥陀如来の宿願であられるからです。

だが私たちの無数のご先祖の中には、不幸なことに、念仏を称える勝縁に恵まれることなく亡くなった人もたくさんおります。年回法要というのは、単に、先立つた父母とか兄弟とかだけの追善ではなく、併せてそういった無縁の遠い先祖のご供養もすることなのであり、このところを忘れてはなりません。追善供養には、お念仏を称えることが一ばん最上の供養なのであって、それは凡夫のこの私が阿弥陀如来様のみ力を頂くことであり、その頂いたみ力を、それらご先祖様に振り向けて（回向＝えこう）、その往生を具現させてもらうことで、法然上人はそのところを、次のようにお示しになられております。

「亡き人のために念仏を回向し候えば、阿弥陀仏、光を放ちて、地獄・餓鬼・畜生を照し給い候えば、この三悪道に沈みて苦を受くる者、その苦しみ休まりて、命終わりてのち、解脱すべきにて候」（『往生浄土用心』）

これは現代的にいうと、「南無阿弥陀仏」と称えることによって、忘れていた莫大な数のご先祖様の存在が認識されて、このご先祖様のお陰で、今日の自分があるという自覚になり、感謝になるわけです。かくしてご先祖様は、無縁の悪道の存在から、有縁の私を育ててくれる存在に一変したのであり、それが法然上人のお言葉でいう「亡き人の……解脱」ということであります。

次にそれでは、すでに生前、あるいは臨終にお念仏を称え、確かにご往生しているのに、その方々に何で法事などして追善供養をするのかというと、この場合は、こちらからの報恩感謝の行いとしての念仏となります。「ああ、今日は父親（又は母親、その他）のご命日である。親はよく念仏を申された方であった。今日自分があるのは直接この親（その他、恩人など）のお陰である。このご恩に報ゆるため、阿弥陀如来様ご本願の行である念仏を称えさせて頂きます」とこうなつて、法事が勤められなければならないのです。法然上人は、こここのところを、次のようにお教えになりました。

「孝養のために精舎建立の営みをなすことなかれ。心ざしあらば、おのおの群集せず、念仏して恩を報ずべし」（『御臨終の時門弟に示されける御詞』）

これは、極楽往生した人へ孝行しようとして寺院などを建てるようなことはしなくともよい。もしその心があったなら、わいわい徒らに人が多く集つたりせず、ただひたすらお念仏を申して、報恩の行いとしなさい、という意味であつて、非常に大切な法事の心構え

であります。

このように、浄土宗には追善供養に二つの意味があつて、①極楽往生した人へは報恩感謝のため、②無縁の人へは拔苦与楽即得往生のため、と、法然上人のご教示にハッキリとあるのであります。

とくに法然上人は、「孝養の心を以て、父・母を重くし思はん人は、まず阿弥陀ほとけにあずけまいらすべし。我が身の人と成りて往生を願い念仏する事は、ひとえに我が父・母の養いたてたればこそあれ。我が念仏し候功徳をあわれみて、我が父・母を極楽へ迎えさせおわしまして、罪をも滅しましませと思わば、必ず必ず迎えとらせおわしまさんずる也」(『或る人に示せし詞』)と教えられて、父母への報恩追善には、念仏が最上であることを力説しておられます。浄土教に追善供養はないはずとの意見は、考え過ごしであり、至当ではありません。

また、四十九日の仏事は、死者の霊が四十九日間滞在するという思想から来ており、七日目七日目に善悪を計る裁判が行われるなどという俗説があり、七日目七日目に供養をするわけですが、浄土宗ではこういう説を取りません。

浄土宗三祖良忠上人は『往生礼讃私記』の中で、はつきりと、浄土の信者が亡くなった際は、中陰(ちゅういん、四十九日)というものはないのだ、と明言されております。ただし善導大師のお弟子であられた懷感禪師は、『釈浄土群疑論』の中で、浄土の信者が亡くなった場合、中陰のようなものはあるが、しかしそれは極楽の蓮華の上に乗るのであるから、穢土(えど、この世)の中陰とは全く異なる、ともいつておられます。それで浄土宗では四十九日の仏事

も専らお念仏を称えるのであって、四十九日仏事という實際世間の風儀を、念仏増進の勝縁とするわけであります。決して、亡霊が四十九日間フラフラいるからなどといった意味で営んでいるのではないのです。法然上人がお亡くなりになられたときも、お弟子たちは、念仏中心の四十九日法要を行っておりますし、法然上人のご伝記である『勅修御伝』の中には、お弟子が「四十九日の念仏」の功德で、下品の位から上品に進んだとの話もあります。

年回等の法要は、念仏増進の機縁として、浄土宗としての立派な追善供養の意義があるのですから、よくそのことを知っておいて、惑わされないように信仰生活をしなければなりません。

須藤 隆仙（すどう りゅうせん、1929年・2018年12月12日）は、浄土宗の僧侶、歴史家、民俗学者、宗教学者。

1929年に北海道上磯町（現在の北斗市）にて生まれる。大正大学仏教学部卒業。中外日報函館支局長などを経て、函館市称名寺住職。北海道の歴史を中心に多くの著作をなした。

2018年12月12日に死去。89歳没。

講 師

頼住光子

釈尊より法然へ 大乘仏教における浄土宗

よりずみ みつこ

1961年神奈川県生まれ。東京大学教授・文学博士・文学部倫理学研究室。
日本倫理思想史を専門とする中で日本仏教を研究、道元の『正法眼蔵』、
親鸞の『教行信証』などをテキストとする中、法然の『選択本願念仏集』
に注目。釈尊からつながる法然上人をとらえ直して、浄土宗の魅力にせ
まる。著書『さとりと日本人：食・武・利・徳・行』（ふねうま舎）ほか。

会場 **東京 芝 大本山 増上寺 慈雲閣 1F ホール**

- 東京都港区芝公園4-7-35
- 地下鉄都営三田線芝公園または御成門下車徒歩3分
地下鉄都営浅草線大門下車徒歩5分
JR浜松町下車徒歩10分

6月18日(火)

午後1:30開場 2:00開演 (3:30終了予定)

会費 **1,000 円**
(当会会員無料)

問い合わせ先 法然上人鑽仰会

〒105-0011 東京都港区芝公園 4-7-4 明照会館 4 階

電話：03-3578-6947 FAX：03-3578-7036

法然上人 と 親鸞聖人

〔連載二十二〕

親鸞聖人による
俱会一処への視座①

林田 康順

（大正大学教授）

親鸞聖人による俱会一処をめぐるご法語

前回までに親鸞聖人の捉える阿弥陀仏と極楽浄土は、親鸞聖人ご自身が仰るように、私達が個別具体的に発す眼・耳・鼻・舌・身・意という六識作用によっては到底認識し得ない、「こころ」や「ことば」の及ばない仏であることを紹介してきました。そして、親鸞聖人は、『観無量寿経』や『阿弥陀経』に説かれる仏・仏土は方便化身・方便化土であって、そうした仏・仏土を超えた『無量寿経』に明らかにされる真仏・真仏土に帰入すべきことを訴えておられるのです。

ここで注視すべきなのが、『阿弥陀経』に説示される「俱会一処」についての捉え方です。本連載の第十二・十三回「法然上人が捉えたお浄土①②」において、法然上人が示しになったお浄土は、先立たれたかけがえのない大切な方との俱会一処、あるいは、この娑婆世界

に遺された方に向けた還相回向が叶うお浄土であることを明らかにし、その大切さや尊さについて縷々言及してきました。法然上人は、私達一人ひとりに各別な個（個性）は娑婆からお浄土に至るまで連続しており、大切な方との関係（関係性）も今生から来世へと継続していると理解しておられました。その一方、親鸞聖人は、俱会一処についてどのように捉えておられたのでしょうか。

まず『歎異抄』第九条において親鸞聖人は次のように述べられます。

いそぎ浄土へまゐりたきころの候はぬは（中略）浄土へいそぎまゐりたきころのなくて（中略）なごりをしくおもへども、娑婆の縁尽きて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまゐるべきなり。いそぎまゐりたきころなきものを…（真宗聖典 八三六―八三七）

（試訳）一刻も早く極楽浄土に往生したいという心が湧き起こってこないのは（中略）お浄土に早く往生したいという心が湧き起こらず（中略）どれほど名残り惜しいと思っても、この娑婆世界の縁が尽きて、どうすることもできずに命終わる時、お浄土に往生させていただくのです。早く往生したいという心のないような者を…

あるいは『親鸞聖人御消息』『有阿弥陀仏御返事』において次のように述べられます。

この身は、いまは、としきはまりて候へば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にてかならずかならずまぢまゐらせ候べし。（真宗聖典七八五）

（試訳）私親鸞は、今はもうすっかり年老いてしまったので、きつとあなたより先に往生するでしょうから、極楽浄土で必ずやあなたをお待ちしています。）

このように親鸞聖人のご法語には、浄土に「まゐる」、あるいは、浄土で「まつ」など

といった表現が散見されます。中でも、『親鸞聖人御消息』『高田の入道殿御返事』において情感を込めてしたためられた次の箇所が、これまで注目されてきました。

親鸞はさきだちまゐらせ候はんずらんと、まぢまゐらせてこそ候ひつるに、さきだたせたまひ候ふこと、申すばかりなく候ふ。かくしんばう、ふるとしごろは、かならずかならずさきだちてまたせたまひ候ふらん。かならずかならずまゐりあふべく候へば、申すにおよばず候ふ。かくねんばうの仰せられて候ふやう、すこしも愚老にかはらずおはしまし候へば、かならずかならず一つところへまゐりあふべく候ふ。明年の十月のころまでも生きて候へば、この世の面謁めんえつ疑なく候ふべし。入道殿の御ころも、すこしもかはらせたまはず候へば、さきだちまゐらせても、まぢまゐらせ候ふべし。(真宗聖典七六九―七七〇)

(試訳 きつと私親鸞の方が極楽浄土へ先立つことであろうと、その時を待つておりましたが、覚念房が先立つてしまったことは、何とも言葉がございません。覚信房も先年先立つてしまいました。必ずやひと足先にお浄土に往生し、そこでお待ちになっていることでしょう。必ずやお浄土に往生するお互いですから、あらためて申しあげること何もありません。覚然房が仰せになつていたことは、老僧である私の思いと何ら異なるものではありませんので、同じお浄土に必ずや往生することでしょう。来年の十月頃まで生き長らえておりましたならば、この世でお会いできることは疑いありません。ただ、あなたのお心も私と何ら異なるものではありませんから、私が先立つて往生してもあなたをお浄土でお待ちしておきましょう。)

ここで親鸞聖人は、浄土に「まゐる」、浄土で「まつ」、「あふ」などといった言葉と共に

に「一つところへまゐりあふ」としたため、これが親鸞聖人所説の俱会一処の典拠として広く用いられてきました。

かつて佐々木正典先生は「これから皆さま方を案内する大谷本廟には一万以上のお墓があります、その中に「俱会一処」と刻まれた墓石が多く見受けられます」（『ポストモダンの親鸞―真宗信仰と民俗信仰のあいだ―「浄土真宗と祖先崇拜」一五三頁）と指摘されました。私も、東山の大谷本廟に参拝した際、この佐々木先生のご指摘を实地に確認させていただきました。また、私は、日本各地を訪れた際、なるべく時間を見つけて地元の寺院に参詣することを心掛けていますが、真宗の寺院にお参りさせていただくと必ずといっていいほど「俱会一処」と刻まれている墓石に出会います。

なるほど、聞法を重視してきた真宗では、布教の場において、前述した「高田の入道殿御返事」を通じて俱会一処を説き、その教えを尊く受けとめられた門徒の方々が、墓石に「俱会一処」と刻み込んできたのでしょうか。そして、お線香を供養し、お水を注ぎ、「またお浄土でお会いしましょう」という思いを胸に「俱会一処」と刻まれた墓石に手を合わせ、先立たれた大切な方に祈りを捧げてこられたのです。もちろん、そうした思いは、浄土宗の方々も真宗の方々も何ら違うことはないのです。

俱会一処は伝道教化の一環に過ぎない？

しかし、親鸞聖人の著作を調査してみた結果、こうした浄土に「まゐる」、浄土で「まつ」、「あふ」などといった表現は実はごく少数で、「一つところへまゐりあふ」といった表現にいたっては、この「高田の入道殿御返事」一通のみのようです。こうしたことから、龍谷

大学の川添泰信先生は、次のように述べられます。

親鸞において『阿弥陀経』に説示される「俱会一処」の世界は自力の真門の行者の往生する世界として領解されていた。それゆえ親鸞及び真宗歴代においては「俱会一処」の語句は用いることがなかった。ではさらに親鸞の明かす浄土の世界とはどのような世界として領解されているかということについては二つの側面を見ることができ、一つには論理的、知的側面であり、そこでは浄土は①本願に酬報した世界であり、またその世界は、②無量の光明とも智慧とも称される世界であり、そしてさらに、③虚空なる無辺際の世界であるということである。また二には宗教的、信仰的側面であり、そこでは浄土はともに「まつ」べき世界として領解されているのである。したがって親鸞においては「俱会一処」の語句は当面においては自力の世界を意味するものであるが、しかし浄土の理解として「ともに出会うべき世界」としての意味はあるものと考えられる。（『親鸞における俱会一処の問題』『印度学仏教学研究』四五—二、五四頁）

ここで川添先生は、親鸞聖人にとって俱会一処が成立する場合は、あくまでも自力の念仏行者が往生する場であるとしながらも、宗教的・信仰的側面としての意味はあるものと結論づけられている。しかし、「当面において」と限定的な用語を用いているように、その叙述はいかにも歯切れが悪く、論理的に整理されているとは言い得ないようです。

そこで、『教行信証』をはじめとする親鸞聖人の教義書を中心に、さらに考察を加えられた武蔵野大学の渡邊了生先生は、次のように述べられます。

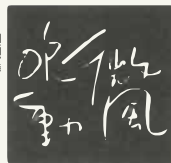
彼（親鸞聖人）の弥陀真土観において、『小経』（『阿弥陀経』）所説の実有的「俱会一処」の浄土観を理解するならば、それは明らかに「方便化身土」として「真化分別」

されるべきであると結論づけることができる。（中略）確かに、前掲の「高田の入道殿」への書簡の内容表現には実有的な来世の浄土観を垣間見ることもできる。したがって、その書簡の内容を「俱会一処」によって解釈することも可能であろう。けれども、やはり、その場合にも「弘願真実」・「智慧の信心」（真仮分別）からは、それを「方便化身土」として説示された「方便誘引」の内容として理解し、「顕彰隱密」の義をそこに信知していかなければならないのである。とくに、この書簡の内容が伝道教化の一環として、ある特定の人物に宛てられたものであること、また親鸞聖人自身が従来（浄土教において）「厭離穢土・欣求浄土」の旗印とともに、もてはやされた「俱会一処」の常套句を、あえてここに示さなかったこと等を考えると、なお一層その感が強くなる。（「親鸞聖人の思想にみる「俱会一処」の理解」『印度学仏教学研究』四七—二、六六〇頁—六六一頁）

ここで渡邊先生は、親鸞聖人にとって「高田の入道殿御返事」に叙述されるような俱会一処が成立する場は、あくまでも「方便化身土」に留まり、どこまでも「方便誘引の内容」、「伝道教化の一環」として理解すべきであり、親鸞聖人の真意はそこにはなかった、と断言されているのです。

（続く）

石田一裕



微

風

吹

動

大河の向こう

五月雨や大河を前に家二軒

与謝蕪村

五月雨という言葉の「意味」がわからなかった。

私の故郷は五月に春本番を迎える。長い冬が終わり、雪が姿を消す。現れた大地には雪解け水が水溜りを作り、その中にはカエルの卵を見つけることができる。グリーンデンウィークが過ぎると桜が開花し、穏やかな風が春の匂いとウグイスの鳴き声を乗せて吹き抜けていく。冬の間、大地の中で眠っていた命が、春光を浴びて動き出すのが、最北の五月である。

五月雨という言葉と初めて出会ったのは、古文の授業であつた。芭蕉の「五月雨を集めてはやし最上川」の一句を学んだ時のことだ。当時、五月雨も最上川もわからなかった私には、この句を味わうことができなかった。もちろん「五月雨」は五月に降る雨、いわゆる梅雨のこと、初夏に降る長雨であることや、最上川が山形県を流れていることは学んだ。しかしながら、いくら言葉の意味を学んだところで、五月雨も最上川も、自分自身の中で故郷の五月の天気とはどうにも結びつかなかったのだ。

高校卒業後に上京して、三ヶ月後、梅雨を初めて実感した。爽やかさと正反対の一日がこんなにも続くのかと驚き、

そして、人生初体験の氣候に体調を崩したことは、今でも忘れがたい思い出である。

ある言葉を本当の意味で理解するということは、辞書にあるその言葉の定義を知ることではない。それが表す状況を経験することである。それは言葉の内実を把握することとも言えよう。それによって、奥行きを持って言葉を味わうことができるのだ。

そこで蕪村の冒頭の句である。降り続く雨が川幅を大きく広げている。普段は河岸から離れて立つ家が、今にも大河に飲み込まれそうだ。その危うい光景が、余計に、川の雄大さを際立たせている。

かの正岡子規はこの句の「たいが」という響きに「水勢急」な様を感じ取った。勢いよい流れは轟々と川音を響かせている。しかし、二軒の家は静寂に包まれている。

私にとって、この句はインドの聖地ヴァラナシで見たガンジス川の光景を思いおこさせる。その川縁から望む向こう岸は遠く、眼前には茶色い水が悠々と流れていく。その流れは子規の言うような急流には見えない。けれども、自分が立つこの岸边と、遙か彼方の対岸を分けるその流れは、大河と呼ぶに相応しいものである。

この大河が隔てる両岸を、迷いの此岸と覚りの彼岸と受け止めれば、そう、仏典に現れる川そのものである。こちらの岸から望むあ

ちらの岸はとても遠く、目の前の大河を渡りきることは、実に難しい試みであろう。釈尊の教えはそんな大河を渡るいかだや、渡り切るための中継点となる洲にたとえられる。その教えは抽象的なものではなく、雄大に流れる大河を渡る具体的な手段なのだ。

ふと目を閉じる。すると私は彼岸と此岸を分ける大河を前に佇んでいる。視線を横に移す。そこには釈迦如来が立っている。釈尊は私に彼岸の美しい様子を説き示し、遥か彼方の岸を指差した。しかし、私には大河を渡るための一歩が、踏み出せない。

もう一度、大河を見る。視線を足元から、大河の向こう岸に移す。すると、そこにはもう一人のみ仏がいることに気がつく。躊躇う私を優しく迎え取ろうとする阿弥陀如来だ。大河を挟み、二尊が向き合っている。その間に、まるでこの道を歩めというように白い道が浮かび上がる。そして、二尊は示す。生死を分ける大河を渡る方法を。

南無阿弥陀仏。一声の念仏は大河を渡るために踏み出す一歩。

このわずかな歩みを、二尊は暖かく見守っている。その暖かさによつて、私は彼岸への歩みを続けられる。大河を渡りきる日がいづ来るかはわからない。それでも、大河の向こう側を目指して、この白道を歩み続けよう。

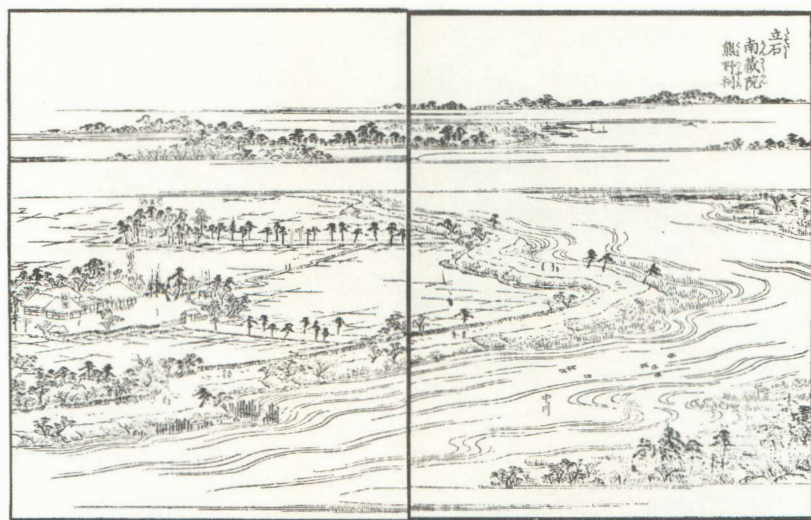
江戸の川 を歩く

第二十九回

江戸ウォーカー

森清鑑

これは恐らく、大川端、源森川から横川に入る、業平橋沿いにある、大岡裁き、縛られ地藏で有名な南蔵院と区別して呼んだものであろう。こちらの南蔵院は後方にある熊野神社の別当寺。熊野神社は立石村の鎮守で歴史は古く、全国にある熊野信仰の一つとして千年頃に建てられた。その別当寺である。長谷川雪旦は江戸名所図会でこの辺りの風景をリアルに描いている。その風景の中心はなんとと言っても滔々と流れる中川である。大きくくねって北に流れを変える中川。川沿いの土手道から田の中を参道があり、簡素な門を潜ると南蔵院。その背後に同じように田を縫う参道。小さな茅葺き門を潜ると瀟洒な熊野社がある。広々とした自然の姿。参道の両端には木々が立ち並び、道標になっている。ここで中川は大きく左に曲がり北へと向かっていく。絵を見ると、この流れの変化が手に取るように分かる。土手道を参詣人が歩いている。中川の滔々たる流れを楽しみながら。風光明媚な立石村は一時、將軍家の鷹狩りの指定場所でもあった。



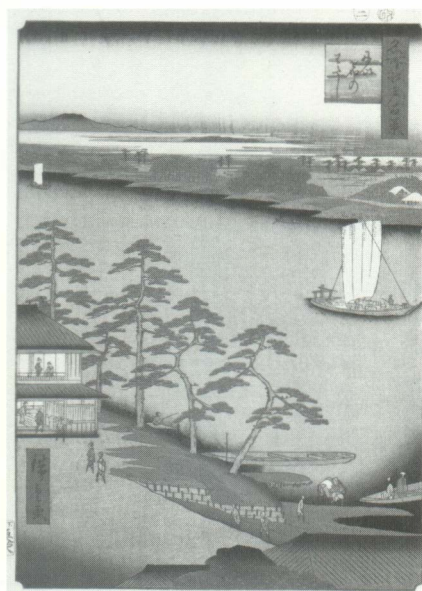
江戸名所図会：「立石南蔵院、熊野社」：絵の下を流れる中川は、ここで大きく北へと蛇行

新宿の渡し にいじゅく

中川は、立石南蔵院の角を渦巻くように蛇行し、青砥からは北に向けて一直線。亀有近くまで行くと新宿の渡し場にいじゅくばが見えてくる。日本橋から水戸街道を歩いてきた旅人はここで渡し船に乗り、対岸へ。降りるとそこは新宿。上宿、中宿、下宿と宿場は箱形に並び水戸街道はその中を東西一直線。江戸川まで行く。すると、江戸川沿いには寅さんで有名な柴又がある。その先は松戸だ。新宿の渡し場。大方の旅人は千住宿で一泊し、千住大橋越えて荒川を渡り、東へ一直線。亀有経由でここに着く。広重はこの渡し場を見事に描いている。二階建ての待合所があり、段々を降りると川縁に出る。そこには大きな待合船が待機している。高い松の木が林立。これは防風とともに旅人の目印。のどかに流れる中川には江戸に向けて荷を運ぶ帆船掛船が一艘、二艘。船頭が漕ぐ小舟も見える。待合所で寛ぐ者。渡し場に降りていく者。あちこ

ちで釣り糸を垂らしている姿も見える。対岸への渡し船は定期的に出ている。ここでは船賃は取らない。無料。待合所から眺める景色は絶景。中川の先には原野が広がり、遙か先には日光連山が見える。対岸の新宿の屋根が見えている。ここは釣

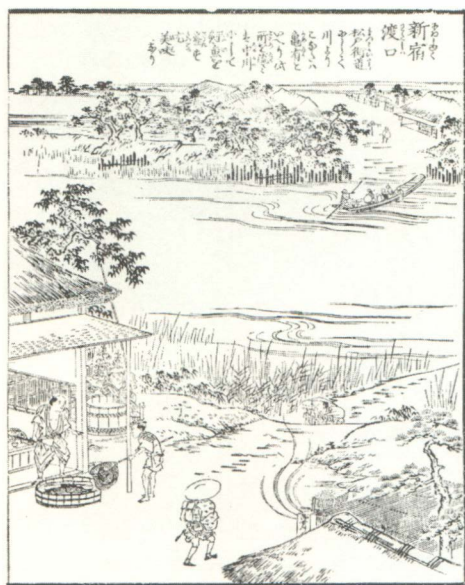
広重「江戸名所百景」に「いじゅくの渡し」



りの名所でもあり、鯉、鱸、鯰、鮒などが釣れた。

新宿

新宿は文字通り新しくできた宿場の意味。規模も小さいが旅人は千住から、ここまで歩いて来て一泊。宿場の先には、水戸街道から分かれる佐倉街道があり、通行人も多く、休憩所としての利用客も多かった。特に参勤交代の大名行列は、千住から松戸まで一気に行くケースが多く、その場合には、ここでは休憩をとる。水戸街道と佐倉街道の交差付近には、大きな茶店が軒を並べている。藤屋、中川屋、亀屋。とはいえ、新宿は簡素な宿で、雪旦は名所図会「新宿渡し口」で対岸の新宿の様子を垣間見れるように描いている。この絵のキャプションで松戸街道とか中川の鮮魚は美味と書かれている。松戸街道とは松戸から江戸湾に近い市川まで約一里の街道。通称、鮮魚街道のこと。新宿の渡しを過ぎて中川を北にちよつと行くと右側は飯塚村。ここに夕顔観音堂がある（今はな



江戸名所図会「新宿渡し口」
絵の上部に新宿の様子が描かれている。

い）。身の丈五寸の観世音金像が祀られている。瀟洒な観音堂の前は畑で百姓が懸命に働いている姿、絵の左上に滔々と流れる中川。当時の自然田園風景が描かれている。

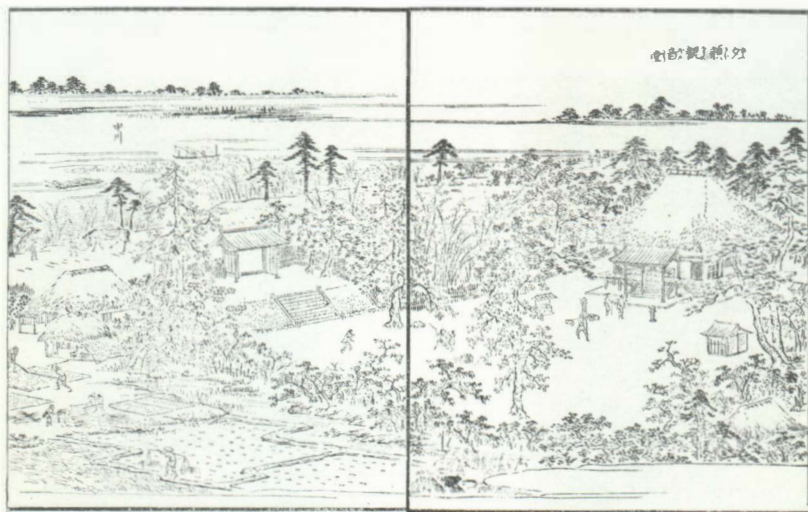
さらに中川を北上。すると今の埼玉県八潮市、

三郷市。江戸川と結ぶ形で水元公園があるが、この辺りから中川は古利根川と江戸時代呼ばれるようになる（今は中川で統一）。広大な水元公園はもともと江戸湾に下る利根川の河川敷であった。家光は利根川の東遷後、この河川敷を埋め立てる。そして近代になつて水郷公園化されたわけである。

利根川に向かって北上

このあと、中川は利根川本流に向かって北上を続ける。利根川に近づくに連れ、大落古利根川を始め、幾つもの河川が合流。今日では中川で通っているが利根川本流の側にある羽生市辺りが中川の水源となっている。江戸期では利根川東遷工事とともに複雑な川の付け替え工事が成されてきたのであろう。昔は皆利根川の分流であったのである。

（つづく）



江戸名所図会：「夕顔観音堂」：絵の左上に中川の姿。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第九十七回

第三部

充実と稔りの白秋へ

愛弟子・長谷川良信と社会事業その二



教え子はあえて指導せず

当初長谷川良信は、入学したての宗教大学当局に私的な不満を抱き、ある種の憂さ晴らしぐらいの気持ちで同級生をかたらつて試験のボーコットを企てたにすぎなかった。それが大学の教授でもあり寄宿する西光寺の住職でもある渡辺海旭から、やるのなら「私憤」からではなく「義憤」で立ち向うべきではないかとうながされて思いついたのが「細民への外米格安販売」であり、さらにそれがきっかけとなって、これまた海旭から水を向けられて、夏季休暇を丸々つかって日本各地へ「社会事業視察の旅」に出たのだった。

しかし当の海旭には、自分は先生で未熟な教え子をしかるべき道へと導いてやらねばならないという思いから「指導」をしたおぼえなどさらさらなかった。弟子の望外の成長ぶりに驚かされ、ただただ素直に喜ぶだけだった。

後に山本五十六が「上策の教育手法」としたとされる「やってみせ、言ってきかせてさせてみて、褒めてやらねば人は動かじ」とは真逆であった。先回りして手取り足取りして懇切に教えたりはしない。ましてや褒めたりなどもしない。教え子たちをやさしくじっと見守って、自主性が引き出されるのをひたすら待つ。見方によっては「放任主義」だが、それは決して「ほったらかし」ではなかった。十一年にわたるドイツ留学から帰国して西光寺の住職に復した海旭は、日本各地から多くの寄宿生を受け入れたが、寺だからといって厳しい修行を強要することもなく、当初は、期待をこめて送り出した寄宿生の親たちや地元の家を大いに不安がらせたものだった。

自らにはあくまでも厳しく

ちなみに渡辺住職と西光寺の寄宿生たちの一日は、こんな具合であった。

海旭は朝四時に起きると、庫裏の戸をあけ

はなつて朝の勤行をはじめののだが、書生たちは、布団の中にもぐりこんで、高いびき。なかには、

「先生が朝っぱらから戸をあけはなつもんだから、野原で寝ているような気分、眠れやしない」

などと寄宿仲間に愚痴をこぼしては、起きるとおもいきや、そのまま二度寝をきめこむ剛の者もいた。しかし、そんな連中も、やがては海旭の毎朝の仏前奉仕に接するうちに、いつまでも自堕落がでなくなるのであった。

その厳格・徹底ぶりはこんなふうだった。

朝早くから読経をするだけではない。勤行の前の環境を整えることも徹底していた。とくに献花献香には念を入れ、いつも生々とした花を供養し、遠くインドから取り寄せた沈香を自らコツコツと挽いて割り切つて焚くのである。ついでにいうと、海旭はその高価な薫香を檀家や弟子たちにもおしげなく与えた。

堂内での威儀作法も厳格一途で、海旭は必

ず手と口を浄め、服装も下着からすべてを改めて浄衣でなければ昇殿しなかった。そして毎朝、まず本尊前で回願をすますと、歴代上人の位碑前から聖徳太子の御宝前、檀徒の位牌前へと順ぐりに勤行、ついで自ら香炉をとると墓所へと向かい、有縁無縁一切の墓に読経し供香する。

海旭の自らの厳格なる作法は早朝の勤行の間だけではない。

念珠が手から離れなかったごとく、和服であれ洋服であれ、浄香が海旭の袂やポケットになかったことは寸時もなかった。談話や会食に応じてつねに浄香を焚きこめていた。

本堂下陣の一般焼香用の香炉にも、毎日午前四時には、大きな桜炭が参詣人の有無に拘らず赤々と入れられていた。

七時になると、海旭は市電にのつて、帰国後ドイツ留学仲間の荻原雲来から校長を引き継いだ芝中学校へ出向く。そして夕刻には西光寺に帰宅、そこから読書、資料の渉猟、書

き物に集中し、十二時をかなりまわってからようやく床に就くのである。恐らく睡眠時間は二、三時間であつたろう。

こんな海旭の勤勉一途を見ていては、やんちゃざかりの寄宿生たちが、いつしか師を見習うようになるのも当然だった。

海旭の自坊・西光寺はさながら梁山泊

帰国後の海旭は「生涯不犯」をつらぬいたが、その理由を尋ねられると、しばしばこう答えた。

「女房をもらつて貧乏をするぐらいなら、その金で学生の世話をしたい」

そして、実際そのとおり実行してみせた。

教え子の中には、金もないくせに事業を起こしては失敗し、二進も三進もいかなくなつてから尻を海旭に持ち込んでくる者もあつた。そんなとき、海旭は「こ、困つたやつだな」と言いながらも、自らの財布をはたき、それでも足りないときは当人にかわつて債権

者に談判に及び、自ら金策に奔走した。

独身主義のくせに、いや独身主義だからこそというべきか、門下生の某の結婚がきまつたときなどは、わがことのように喜んで、西光寺を披露宴会場に提供、そのために座敷の畳を全部替えただけでなく、料理の献立から、新居や新婚旅行、あげくの果ては新婚挨拶状の印刷の手配まで水も漏らさぬ面倒見のよさを発揮した。

こうして自坊・西光寺には、多くの書生や学生が寄宿、その数はつねに十人をくだらず、海旭も彼らと寝食を共にしていた。さながら西光寺は梁山泊であり、海旭はそこを仕切る俠客の親分だった。

生涯の信奉者の筆頭、長谷川良信

海旭の門下生への接し方は、終生変わることはなかった。

自らにはあくまでも厳しく、いつばう教え子にはあくまでもやさしく見守る。これが海旭

流であった。この俠客の気質にも通じる作風が、門下生たちにはたまらない魅力となり、それゆえ西光寺を巣立っていった海旭門下の多くは、生涯の信奉者となった。

また西光寺の寄宿生たちには、住職の海旭の俠気も魅力だったが、指呼の間に「浄土宗労働共済会」の無料宿泊施設があり、ここの社会事業の手伝いが大いなる刺戟となった。西光寺は、海旭の社会事業の前進基地であり、人材の供給地であった。海旭についてみようみまねで手伝っているうちに、社会事業にのめりこんでいく門下生も生まれた。

その筆頭となったのが長谷川良信であった。明治四十三年宗教大学に入学、渡辺海旭に出会い、西光寺に三年間書生として寄宿。東京で米騒動が起きた明治四十五年、大正大学本科一年生として貧民救済活動に献身。当時『中外日報』などで「宗教大学学生の快挙」と報じられたことはすでに述べたとおりであるが、大正四年三月本科を卒業後は、渡辺海

旭の勧めもあって、東京市養育院巣鴨分院に就職。しかし、「人間の掃き溜め」と言われていた過酷な環境での施設での激務がたたり、一年足らずで結核で倒れて退職を余儀なくされた。

それでも良信はなんとか小康を得ると、大正七年秋には、東京府の慈善協会巣鴨方面救済委員を委嘱される。それと同時期に、社会事業研究室の実地調査部員として西巣鴨界隈の貧民地域、通称「二百軒長屋」に単身移住、就学できない年少労働者のために夜学の勉強会を開いた。これが母体となって数か月後、さまざまな救貧福祉活動が広がり、大正八年一月、組織的・系統的なセトルメント活動の拠点として「マハヤナ学園」が創設される。「マハヤナ」とはサンスクリットで「大乘」の意味で、命名者は、渡辺海旭であった。

海旭の「愛弟子」から「分身」へ

こうして当初、愛弟子であった長谷川良信は、やがて海旭の「分身」となっていた。たとえば「浄土宗労働共済会」を立ち上げることで海旭が目指した仏教界初の社会事業も、良信が「分身」となったサポートなくしては、その実を上げることではできず、単なる「お題目」で終わったかもしれない。

また海旭はドイツ留学時代から、日本の近代化にとって女子教育が不可欠であると痛感していた。この具現化にも良信が「分身」となって支えてくれた。良信はベルリン女子社会事業学校に留学、その成果を生かして、大乘女子学院、巢鴨家政女子学院、巢鴨女子商業学校を開校。それらの院長と校長は海旭がつとめ、実務はすべて良信が「分身」として担い、日本の女子実業教育の先鞭をつけ、女性たちの自立によって近代化の矛盾である格差と貧困から彼女たちを救うことになる。

渡辺海旭は、六十一年という短い生涯のなかで、宗門中枢として改革を行ない、宗教学者として「大正大藏経」を編纂し、芝中の校長として有為な人材を育成し、文案家としてカルピスの名付け親となり、さらにはインド独立運動の志士ラス・ビハリ・ボースをはじめアジアの志士たちを支援するといった驚嘆すべき偉業をなした。だが、もし良信という類まれなる「分身」がいなかったら、社会事業と女子教育に人生大半のエネルギーを費消することになり、おそらく海旭の八面六臂の活躍はなかったであろう。

(つづく)

本誌表紙の写真家

写真集

『PERSONA 最終章』

フレームから溢れ出す人間の圧倒的な存在感。

世界中で絶賛された

伝説の写真集『PERSONA』から15年、
浅草ポートレイト待望の完結編ついに刊行！

解説＝堀江敏幸。



鬼海弘雄（きかい・ひろお）

1945年、山形県寒河江市生まれ。
代表作として、市井の人の醸し出す存在感と向き合うポートレイト『PERSONA』、人々の営みの匂いを写し出す、町の肖像『東京迷路』、インドやアナトリア（トルコ）「スナップ紀行」のシリーズがある。写真を通じて人間の存在の根源的なあり方を捉えようとしている。1988年『王たちの肖像 浅草寺境内』で日本写真協会新人賞、伊奈信男賞、1993年『INDIA』で「写真の会」賞、2004年『PERSONA』で土門拳賞、日本写真協会年度賞など受賞。



定価：10,000円＋税

仕様：天地270×左右220mm 上製カバー装

写真総数205点 ダブルトーン印刷

発売：筑摩書房

さっちゃんはネ...

かまちのふくら



編集後記

北の空見あげるばかりの初夏の宵 岱潤

昨年十二月十二日、我が宗、函館の巨星、須藤隆仙上人が逝去された。

須藤上人は私どもの会にとりまして、たいへん大きな存在でありました。

昭和二十五年から本誌に執筆頂き、そのご執筆された回数は、一一四回にもなり、あとにも先にも唯一無二のお方でありました。連載も「石川啄木」「三部経の再発見」「無謀随録」「生も死も悦べる世界」「選撰集を拝む」等と続き、中でも平成五年から七年まで十八回もの連載となりました「念仏信仰の系譜」は、念仏の教えのインドから中国、そして日

本に至る思想史の流れを解説頂いた壮大なものでした。須藤上人から頂いた恩の大きさを、唯々深く感じるばかりです。

平成九年の夏ですが、私が指定布教で函館を訪ねた時、夕方称名寺さんに御上人を訪ねた時、タクシーの中から御上人が函館の町の話を、それは楽しく詳しいお話をされ、タクシーの運転手が仰天したことをなつかしく思い出します。降りるとき御上人が町に立っている説明板は、全て御上人が書かれたということを説明され、運転手も納得していました。御上人は函館にとっても大恩人だったことでしょう。

御上人の歯に衣を着せないストリートなものの言い拍子を送り、「ありがたい」等のいい方をすることなく、お念仏のすばらしさを説かれた御上人を恩師として偲びたいと思います。(長)

編集チーフ 編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十五巻五月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成三十一年四月二十日
発行 令和元年五月一日

発行人 佐藤良純

編集人 加藤昌康

印刷所 株式会社 曜印刷

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四丁目四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三五七八六九四七
FAX 〇三三五七八七〇三六
振替 〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森厳寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤久雄(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光園寺)
東海林良雲(塩釜・雲名寺)
河本悠大(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
成田昌憲(世田谷・大古寺)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(静岡・回向院)
松清泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(芝・天光院)
水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>

メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 価額:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない

※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

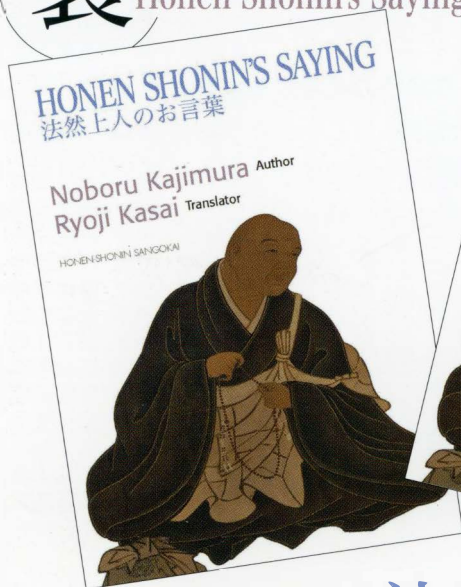
※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と送料は価額に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール(hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

月刊**浄土**の連載が
単行本になりました。

裏 左開きで英文の
Honen Shonin's Saying

表 右開きで和文の
ご法語



和英対応**法然上人のお言葉**

梶村 昇・著 河西良治・訳

ご法語と解説が和文と英文で一冊になりました。

外国の方のお土産にも最適です。A5判・124ページ 頒価 1,000円（税別）

電子書籍は下記 QR コードよりご購入いただけます。

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

HONTO



AMAZON



法然上人鑽仰会だから
こそ作れる
オリジナル単行本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。